

| | | |
|---|--|----------------------------|
| <h1>教育社会推薦書</h1> | | 2023年 1月26日 発行者 矢木信男 |
| 書名 | 「教えから学びへ（教育にとって一番大切なこと）」 汐見稔幸著 河出新書 | 発行日 2021/7/30 |
| <p>1 推薦理由—本書の目的は、「学び」の意味や可能性を問い直し、育児や保育や教育、特に学校教育を時代にふさわしく変えていく方策を探ることである。「学び」の意義を分かりやすく語る。</p> <p>2 キーセンテンス</p> <p>(1) 今、どこの国でも、教育という人類存続に不可欠の営みはどのように形を変えていけばいいのかが、問われている。その転換の原理は何か？ <u>それは、原理を「教える」から「学び」に移せばいいのである。</u> 学びは教えよりもはるかにすそ野が広い概念だ。人は失敗から多くを学ぶ。その学び方が深い人のほうが人生を上手に構築していく。学びに原理を移すと、失敗が重要な意味を持ったこととして光り出すわけだ。生き方の上手な人は死ぬまで学び続ける。教材はあらゆるところに広がっていることや、学ぶ機会はどこにでもあることに気づく。</p> <p>(2) 教育が「教え」の精緻化をミッションとする発想でGIGA（ギガ）スクールを具体化していくと、生徒の成績はどうなるか？ <u>成績は一時上昇するものの、時間が経つにつれて、以前よりも下がっていくというデータを示す研究がある。</u> これは教育を、「学び」を原理に構想していないことからくる皮肉な結果である。</p> <p>(3) では、教育はこれからどうすればよいか？ <u>教育は「学ぶ力を豊かにし、深くする」ということでいい、とわかってくる。</u> <u>教えから学びへの発想の転換こそが、教育を時代の変化に適応させる唯一の方法だと思っている。</u></p> <p>(4) なぜ「学び」なのか？ <u>「学び」は学校でのみ身につけられるようなものではなく、一生続く営みである。人間は死ぬまで学び続ける。</u> そうした学び方の基礎を学校は育ててきたか、という疑問が多々浮かぶ。これまで「なぜ人は学ぶのか」という根本的な問いについてしっかりと挑んでこなかった。効率のよい「教え方」や「学び方」の手段は研究されてきたが、<u>なぜ、それを学ぶのかという最も大事な問いについては、なおざりにしてきた印象がある。世界に正解はない。正解などない。ではなぜ学ぶのか。それを問い続けることこそが、学ぶ目的と言える。</u> だからこそ、死ぬまで私たちは学び続けなければならないのである。「学び」に正解はない。</p> <p>(5) 「生きているっていいな」と心から思えるようになるために、人間には2つのことが必要である。その2つとは？ <u>一つは「自分の自己実現」であり、もう一つは「社会の自己実現」である。</u> 「自分の自己実現」とは、自分が心の深いところで本当に「やりたい」と思うことを何らかの形で実現することである。では、自分がやりたいことは、どのようにして見つけられるのか？ <u>何かをしているとき、どうしてかわからないけど自分が生き生きとしてくるなら、それが、本当にやりたいことだ</u> と思っている。<u>もう一つの「社会の自己実現」とは、社会がその構成要員をできるだけ多く幸せにできるような社会になっていくことを指している。</u> 実は人間</p> | | |

は、自分の自己実現と社会の自己実現を結びつけて考えられる唯一の動物なのである。

- (6) **教育に携わる人たちの関心が、「教え」から「学び」へと移行してきた最大の理由は？** 「これさえ覚えておけば正しく生き、いい社会をつくる力を身につけることができる」と確信をもてるものがなくなったことである。教師が子どもたちに啓蒙する教育が終わったということだ。
- (7) **なぜ、昔は学校に価値があったのか？** 世の中や社会など、新しい事柄を知るためには学校に行くしかなかった。学校で教科書を使用し教えてもらったり、先生の話の聞いたりすることが、一番の知のツールであった。教師は子どもたちや家の人たちが知らないことを知っていた。豊富な知識を持つ教師の話の聞くことは、面白く、それだけで十分に満足できた。知のツールが学校にしかなかったこと、学校が社会の理想を実現してくれる学びの場となっていたこと、時代の変化が遅いという3つの条件が重なり、教師は尊敬され、学校も大事な場所になっていた。
- (8) **これからの学校、教師はどうなるのか？** これからのテーマは「教師が知識をどう教えるのか」ではなく、「子どもたちの学びをどう育てるのか」だということである。学校で教師が子どもたちにできることとして、例えば、同じテーマについて書かれた異なる文章を読み、「どっちが正しいと思う？」とみんなで議論をする。怪しい情報はどうすれば見抜くことができるのかを学ぶ。学んだことをみんなの前で表現し、「どうしてそんなことが言えるのか」「そこはちょっと違うと思う」などと、質問を受けたり、批判されたりしながら自分の考えを検討する。
- (9) **OECDによる学習到達度調査、PISAは、キー・コンピテンシーがどれくらい身についているかを問うものであるが、このキー・コンピテンシーから進化して、2019年にはどんな概念がキーワードとなったか？** それはエージェンシーという概念である。エージェンシーとは、「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任を持って行動する能力」だと定義(OECD)されている。著者はこれを「当事者性」と訳したい。「自分はその当事者である」という感覚である。「二十一世紀的当事者性」と言えるかもしれない。
- (10) **当事者性を大事にするという考え方は、日本でも独自に生まれている。その一つのきっかけが、北海道浦河町にある「ペてるの家」の「当事者研究」である。では、当事者研究とは？** ペてるの家は、向谷地生良（むかいやち いくよし）さんらが、「統合失調症の人がずっと病院の中で閉じ込められ、投薬され続けるのはおかしい。町で暮らすことはできないか」という思いから1984年に設立された。精神障害のある当事者の地域活動の拠点だ。当事者研究は、統合失調症で妄想や幻聴に悩まされる当事者たちが、自分の妄想や幻聴について互いに共有しながら自分自身の研究を進め、自己コントロールする力をつけていく取り組みである。
- (11) **ペてるの家の人たちの当事者研究で明らかになったことは何か？** 彼らは仲間と自分の研究をすることで、妄想や幻聴が出ても自分で対応できるようになったり、困っていたことが改善されたりするようになった。 そのことが注目され、様々な人たちに応用できるのではないかと多くの人がこの方法に注目した。
- (12) **その代表者が東京大学先端科学技術研究センターの小児科医、熊谷晋一朗氏だ。彼はこの当事者研究をどこに応用したか？** 発達障害者に応用した。 自分がそれまで隠していた悩みや

困り事を表現し、それに対しどのように対処していくかを互いに支え合いながら研究している。今、当事者研究は精神疾患や障害をもった人たちにとって大変重要な営みになっている。

- (13) **熊谷さんはこの研究から何を語ったか？** 「自立とは依存先を増やすこと」と言う。 私たちは、確かに依存しなければ生きていけない。これは、障害がある人だけではない。障害があってもなくても、人間はたった一人では生きていけない。そして、支え合っている人たちや、当事者研究をしている発達障害の人たちは、これからの時代に必要な力、エージェンシーを身につけていると言えるであろう。
- (14) **これまでの日本の教育では、エージェンシー、つまり「当事者性」を育てることは重視されてこなかった。例えば、カーボンフリー（脱炭素化）やカーボンニュートラル（温室効果ガスの排出を全体としてゼロに）と言いだめたのはつい最近である。なぜか？** 「環境破壊は知識として知ってはいるけどよくわからない」「私だけ頑張っても大して変わらない」「私がやらなくても誰かがやってくれる」などのように、一人ひとりが、自分が当事者だと認識していないということがあった。
- (15) **自分を大事にするためには、自分のことだけではなく、自分の周りにいる生き物全体を大切に、応援しなければならない。このような考え方を何というか？** ホーリズムと言う。 人間は、これまで森林を伐採するときに、そこに棲む虫など気にしなかった。しかし、森の動物や鳥、虫もその生態系に暮らし、互いに棲み、支え合っている関係である。それらすべてが森という「全体」（ホール）を構成している。これらの生態系が山火事で崩壊していくことまでイメージして全体を考えることが出来るようなエージェンシーが重要になってくる。
- (16) **20世紀的な思考のしかたではもう限界である。世界で次々に起こる問題を解決できないのはなぜか？** それは、その問題をつくってしまった時代の思考の枠組みと変わらない思考の枠組みで問題を解決しようとするからである。 つまり、自分たちの「思考のしかた」や「その思考に基づく行動」が大きな問題をはらんでいたことに関心が向いていなかったということだ。古い思考の枠組みで考えても、新しい問題は解決できないのである。
- (17) **では、問題を解いていくには何が求められるのか？** 前提的な枠組みや色眼鏡を一度全てチェックし直し、何が大事で何が大事じゃないかを見極めること、マインドセットを切り替えることが必要である。
- (18) **「学び」とは、どのようなことを指すのだろうか？** 「学び」とは、脳の中に情報処理の回路が新しくできることである。 「脳の中に情報処理の回路が新しくできる」をさらに別の言い方で置き換えるならば、大きく次の2つが言える。一つは「新しいことを知る」。 ここには新しい知識を得ること、あるいは知識の構造を組み替えて何かが新しく見えてくることも含まれる。 もう一つ、「新しいスキルを身につける」。一つ目の新しい知識を得る、その知識を組み替えて何かが新しく見えてくることを、私たちは「わかる」と呼んだ。
- (19) **「わかる」は3つのレベル分けられる。その3つとは？** ①言葉・名前を知る、②相性の属性を知る、③現象の背景にある法則を知る、である。「わかる」は、言葉・名前を知ることから始まる。これが第一レベルである。言葉や名前は、人間が編み出した認識のためのツール

だ。あなたの前の何本かの木が生えていた。「これはケヤキ。これはブナ。こちらはミズナラ」、存在している木の世界に区切りを入れ、一定の分ける基準を知ることによって違いを認識できる。言葉や名前を知って見わけるとは、世界の分節の特徴を知ることと同じだ。言葉と名前と分節の特徴を紐づけて見分けられるようになったとき、その対象についての理解が深まっていく。言葉や名前を知るとは、「学び」の第一歩として、大きな意味がある。

- (20) **②相性の属性を知る、とは？** 言葉・名前を知ると、次にその対象の属性に興味湧く。属性とは備わっている性質や特徴のことだ。これが「わかる」の第二のレベルである。例えば「この木はマユミ、ととてもしなやかな木で、昔はこの木でつくった弓が、一番いい弓だとされていた。そのため真弓と呼ばれるようになった」この対象が持つ属性を知ることによって、色々な知識が紐づけられてくると、自分にとって親しみが持てるようになる。知れば知るほど、そのものに対する思いが深まり、その対象の背後にある属性、隠れている属性を明らかにしていくことになる。それが喜びとなり、関連することを「もっと知りたい」という気持ちも生まれる。
- (21) **③現象の背景にある法則を知る、とは？** 言葉・名前を知り、その属性を知ると、現象の背景にある法則にも気づけるようになっていく。これが「わかる」の第三のレベルである。例えば、近年、台風や大雨による水害が増えている。台風や大雨についてその属性を知った上で現象について考えるとき、背景に、ある程度の法則を見つけることができる。天気予報はその法則を使っていく。世界を分節した言葉や名前を知った上で、その属性を知り、さらに、世界を切り分けたその言葉、その名前どうしをつなぎ直して法則を見つけ出す。こうしたことを繰り返しながら、「脳の中に情報処理の回路が新しくできる」。これが「学び」だと考えている。
- (22) **「新しいことを知る」について3つのレベルについてわかったが、それだけでは、ただ、知識がたくさんあるというだけに過ぎない。それを記憶するためには何が必要か？** それは、その知識の語義 meaning に、自分の体験を通して蓄えた意味 sense をまぶしながら、記憶していくことが必要である。社会が与えた意味を理解し、そういうものだと取り入れていくことは語義 meaning で、自分が何かを感じたものに意味を与えていくことは、感覚に深くかかわっているから意味 sense である。「学ぶ」とは、「意味」の世界が経験によって深まり重層化し発酵していくことにより、「語義」の世界も深まって進むことだと考える。別の言い方では、「語義」を学ぶことで社会性を身につける。
- (23) **「学び」の入口は、手がかりとして、言葉はとても大事である。アメリカの小児人工内耳に詳しい小児科医のダナ・サスキンドは、「3000万語の格差」(明石書店)の中で、脳と言葉の関係についてどのような関係があると語っているか？** 「思考の学びの基礎となる脳神経細胞のつながりは大部分、生後3年間に起こります。科学的な研究の結果、脳の最適な発達には言葉に依っていることもわかっています」と述べている。また、人工内耳を移植した子どもたちも同様で、手術後、豊かな言語環境で育つ子供たちは能力が伸びるが、そうではない環境では、人工内耳をつけただけでは伸びないと言う。
- (24) **では、豊かな言語環境とは、どんな環境であろうか？** 豊かな語彙はもちろんだが、家庭で子どもが何かを言ったとき、何かをしたとき、丁寧に言葉で応答しているかどうか、子ども

の反応を引き出す丁寧なコミュニケーションをしているかどうかである。保護者の言葉の力や相互のコミュニケーションが大きな影響を及ぼしているということである。

- (25) **教育は、大きな産業をつくるためだけのものではないが、若者が時代の流れを読み、夢を見つけ、実際に新しい仕事、新しい産業をつくり出す能力をもった人を育てられているかもその成否をはかる一つのバロメーターになる。**その点では現在の日本の教育は失敗していると言える。**なぜか？** アメリカのようにGAF Aを生み出すことも、韓国のサムスンや中国のファーウェイ、アリババなどのような企業をつくることもできなかった。なぜかを考える必要がある。
- (26) **教育とは、学ぶ意欲のある人が師と仰ぐ人を見つけ、「どうぞ教えてください」とお願いするところから始まる。**だが、学校では、その人を師として求めているわけではない子どもたちに教えるのであるから、「教え方」に工夫がなければ聞いてくれない。「教え」ではなく、本来の「学び」に再び視点を移すためのヒントが「師弟モデル」にある。どういうことか？ 「学び」は、喜びなのである。「こういうときには、こんなふうに考えればいいのか」と、新しい発見をする。その学びが実際の生活の中で役に立つ。「なるほど」と思えることが増えていく。自分が抱えていた疑問や苦しんでいた原因が見えて、改善できることでもある。
- (27) **では、「学び」が苦痛になったのはなぜか？** それは、本来の学びのあり方から逸脱した強制的なシステムができたことが原因である。学校教育における「学び」が本来のあり方ではなかったことにより、日本で大きな問題が出てきている。その一つが、不登校の子どもたちの増加である。2019年度、不登校の小中学生は全国でおよそ18万人（文科省「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」）で、同調査によると、その原因は、「無気力・不安」が小中学生ともに最も多く、どちらもおよそ40%となっている。
- (28) **不登校の増加は、「学ぶ」視点からみると、どんなことを表しているか？** 不登校の子どもたちは、その子が問題なのではなく、学校に問題があることを提起していると言える。感性が鋭く、「学ぶ」ことの本来の意味に気づいているのかもしれない。新しい可能性を探り、本当の学びを求めている子どもたちなのかもしれない。どんな人間も知らなかったことを知ることがうれしいはずだ。本来うれしいことをうれしいと感じられないところに今の学校の問題がある。親、教師は、子どもに関わる全ての人が、このままの学校でよいのかを省みる必要がある。
- (29) 「学ぶ」とは、どのようにして学ぶのかが問われる。アクティブ・ラーニングが文科省の中央教育審議会の答申で2014年に使われ始めたが、「アクティブ」は能動的、活動的の意味である。文科省の用語集で、アクティブ・ラーニングは、どのように述べられているか？「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」とある。「能動的」の言葉があり、ディスカッションやディベートなど、積極的に表現することが求められているようにも読み取れるが、それは、子どものアクティブな態度を評価するためのものではなく、あくまでアクティブな「教授・学習法」である。
- (30) **では、アクティブ・ラーニングとは、子どもがどのような特徴を表現しているときであろうか？** 京都大学高等教育研究開発推進センター教授の松下佳代氏の「ディーブ・アクティブ

ラーニング」(勁草書房)に次のような内容を取り上げている。「アクティブ・ラーニングの一般的特徴として挙げられる点として、(a) 学生は、授業を聞く以上の関わりをしていること。 (b) 情報の伝達より学生のスキルの育成に重きが置かれていること。 (c) 学生は高次の思考(分析、総合、評価)に関わっていること。 (d) 学生は活動(例：読む、議論する、書く)に関与していること。 (e) 学生が自分自身の態度や価値観を探求することに重きが置かれていること。 (f) 認知プロセスの外化(問題解決のために知識を使ったり、人に話したり書いたり発表したりすること)を伴うこと。以上のように記載している。ここで、アクティブ・ラーニングの本来の意味は、ここまで丁寧に見ていくことでようやく納得のできるものになる。大事なことは、このような条件を知った上で、手を挙げることなく話を聞いて考えている子どもや、じっと教科書を見つめている子どもにも、その子なりのやり方で学んでいるかもしれないと発想できるか否かである。手を積極的に挙げる子は深い学びをしているのかをもう一度考えることである。

- (31) 「能動的」「受動的」について、本来はどんな意味があるのか？ アクティブ active は能動的、活動的と訳されるが、受動的は英語でパッシブ passive である。パッシブの意味を調べたとき、パッシブ passive とパッション passion が同じ語源であり、どちらもラテン語の pati (苦しむ) から派生した英語である。これらを詳細に調べた結果、パッシブは、受動的、無抵抗、受身の、と訳されているが、実は、根底にはとても能動的な意味も含まれているのである。
- (32) 「アクティブとパッシブというのは、アクティブが能動的でパッシブが受動的という単純なことではないのではないか」という。どういうことか？ それぞれの脳の違うところが活性化しているということではないかと思うようになった。つまり、アクティブは大脳新皮質、パッシブはより深いところにある、感情や本能をつかさどる大脳辺縁系や生命の維持に関わる脳幹などが活性化している状態だと考えている。本来、「学び」の場面では、どちらの脳も働かせなければならない。能動、受動という形では分けられない。それが人間の本当の望ましい学びのあり方、情報処理のしかただと思う。上記にもあるように、「手を挙げることなく話を聞いて考えている子どもや、じっと教科書を見つめている子どもにも、その子なりのやり方で学んでいるかもしれないと発想できるか」はアクティブ、パッシブの両面でとらえられるか。
- (33) いま、パッシブに世界とつながることのできる瞑想やマインドフルネスなどが、様々な国で見直されている。どんな例があるか？ プータンの小学校を視察したとき、瞑想をするとより幸福感が上がるということで、小学校の授業の前にみんなで瞑想するようになったと教えてくれた。アメリカでは、2016年頃から小学校でマインドフルネスを取り入れたことで、いじめが減少し集中力が向上したという報告もあり、イギリスでもマインドフルネスを授業の一環として取り入れている学校が増えている。
- (34) 日本では瞑想やマインドフルネスを導入するような動きは見られないが、子どもたちが自分のパッシブな世界に向き合うことで、自分自身の捉え方、世界の捉え方が変わるのは確かである。どのように変わるのか？ 瞑想やマインドフルネスを授業に取り入れるのではなく、子どもたちが感情を大切にし、見る、聞く、触れるという体験を通して世界を感じ取り、そこか

らようやく子どもたちの中に生まれてくる言葉や表現を大事にする環境を整えることである。

- (35) **具体的には、どのようなケースがあるか？** ある絵画教室では、絵を描く時には、全てにおいて絵を描く前に必ず何らかの体験をする。豚を描く時には、1か月ほど子豚を2頭借りてきて世話をした。子豚が餌を食べたり、糞をしたり、子どもたちがそれを掃除したりする。イカを描く時には、実際にイカを触ってみる。ぬるりとした感触を確かめ、イカの吸盤を数える。イカの足の長さに驚いた子どもはその足を長く描き、吸盤に感動した子どもは吸盤をアップして詳しく描く。このように、物事を認識してそこから何かを学ぶとき、子どもたちが「感じる世界」を豊かにしていくことが非常に大切になるわけである。
- (36) **「本来、学びは、パッシブな体験から始まる」とは？** 絵を描く時だけでなく、知識を得る時も同じである。対象となるものをさまざまに観察したり、育ててみたり、匂いをかいでみたりすることで、たくさんを感じ、そこからようやく、「なぜだろう」「知りたい」という世界に入れるのである。学びは、このようなパッシブな体験からスタートするのである。本人が本当に「すごい」「不思議だ」「美しい」などと感動したときには、一気に思考が進むが、それがなく、ただ一方的に詰め込まれるばかりの教育では、その効果も期待できない。
- (37) **2017年、文科省はアクティブ・ラーニングという言葉だけでなく、「主体的・対話的で深い学び」とより具体的に表現した。この言葉には3つの要素が含まれている。その3つの要素とは？** 「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」である。「主体的な学び」とは、子どもが自分で「やりたい!」「知りたい!」と思えるような学びである。体験を通して自分が感じ、何かを表現したい、これは何だろうと動き出すこと、自分が学びの主人公になることである。次に「対話的な学び」とは、ただ、ワイワイと話をすればいいということではない。対話とは、自分の考えを言葉にし、相手の考えを言葉で聞くことで、お互いの違いや共通するもの、どこまで一致しているのかを共に探すやり取りである。小学校では、自分一人で考え解答するのではなく、いろいろな人と対話をしながら、相手との信頼関係を保ちながら刺激し合い、新しいアイデアを出し合うこと、と言ってもいい。そして、「深い学び」とは、自分のこれまで持っていた知識と新しい情報がしっかりと結びつき、自分の中に深く定着する状態だと言える。そしてそれを必要な場面で応用できる力にすることである。
- (38) **「学び」とは「脳の中に情報処理の回路が新しくできること」と定義し、そのためには「新しいことを知る」と「新しいスキルを身につける」に分けられる。「新しいことを知る」は既に上記に説明したが、「新しいスキルを身につける」には何が必要か？** 「21世紀型スキル」として紹介したもの、つまり、「プロセスを実行したり、目標を達成するために自らの知識を責任ある形で活用することができる能力」(OECDによる)がヒントになるかもしれない。これは今、世界の学校教育で重視されている。
- (39) **「21世紀型スキル」の「認知的スキル」と「非認知能力」とは？** 「認知的スキル」である読む力、書く力、計算力、批判的思考力、問題解決能力、創造的思考力に加え、「非認知能力」とも呼ばれる「社会・情動的スキル」が特に注目されている。これは、忍耐力、自制力、レジリエンス、責任感、好奇心、精神的な健康(心身のウェルビーイング、すなわち気

持ちに不安がなく安定していろいろなことに前向きになれる状態を確保する力) などである。

- (40) **学びが起こるきっかけとは「問い」に寄り添うことである。どういうことか？** 学びが起こるきっかけは、問いである。子どもに主体的に学んでほしいと思うなら、算数や数学を、現実の生活の中に見つけていくことが必要である。 日常の世界の中で、子どもたちは様々なことに疑問をもっている。「なんでアリさんは一列に歩くんだろう」「なんでお空は青いんだろう」子どもたちの疑問に対して、「大人には思いつかない疑問だな」「すごいなあ」と私たち大人が思えるかどうか。ここが教育のスタート地点になる。
- (41) **「子ども主体の教育」とよく言われるが、子どもだけが主体になったとしても、いい教育にはならないと考える。なぜか？** 子どもたち一人ひとりが抱いた疑問を出し合い、共有し、皆で話し合う。その中でみんなが一番興味をもったことを一緒に考え、調べる。そのとき、疑問を持った子どもたちに先生も感動しながら、「そういえば、改めて考えたらなぜだろう、不思議だな」と疑問を持ち、一緒に考え、調べ、学んでいく。 先生自身がその子たちをサポートする面白さを感じているかどうかで、子どもたちが本当に納得できるところまでたどり着くかどうかが決まる。その姿勢こそ教師や保育者の主体性である。つまり、子どもに対する理解も含め、先生の中にも食欲に学ぶ姿勢が必要なのである。 子どもたちの主体性と、先生の主体性が複雑に絡まり合って、学びは促進していくのである。
- (42) **「問い」がうまれるのは、その対象について関心があることが前提である。ここには「学びの個別化と学びの共同化が組み込まれることが望ましい。文科省の中央教育審議会も「2020年代を通じて実現すべき『令和の日本型教育』の姿」(2021年)として、個別最適な学び(個に応じた指導)、協働的な学び(多様な他者と協働する学び)を答申に挙げた。具体的にどのようなことか？** 学校では、子どもたち一人ひとりが「もっとこれについて勉強したい」という思いを形にできる時間が必要である。と同時に、自分が学んだことを他者に伝え、他者からの疑問に答え、他者の学びを聞いて面白そうだなと興味の世界を広げる時間も必要である。 子どもたちが何か疑問を持ったときに語り合うこと、その疑問について「面白いことを考えているね」と受け止め合うことが、これからの教育の場には欠かせないのである。
- (43) **社会には、同じ年齢の人だけが集団をつくっていることはない。家族、会社、地域社会も多様な年代の人たちが一緒に暮らしている。なぜ現在の学校は学年で分けられ、教科によっては習熟度別に分けられているのか？** その理由は、先生が教えやすいからだ。 教えることを中心にクラスを編成すると、理解力が似通っている子どもたちをまとめたほうが効率的に教えられるからだ。もう一つは競争させやすいからである。
- (44) **例えば、小学校で1, 2, 3年生を同じクラス、4, 5, 6年生を同じクラスにするとどうだろうか？** 勉強、遊びでも、そこでは様々な関係が生まれる。同じクラスの友達は競争相手ではなく、年上の子は年下の子に対して教え、配慮をし、年下の子は教えられ、憧れを持つことが出来る。 時には逆もあるかもしれない。自分が人の役に立つこと、感謝すること、感謝されること。異年齢の集団の中ではそのような斜めの関係が多様に生まれる。そのような関係

の中での子どもたちの心の育ちや学びを促進する力は、同年齢の均一なクラスと比べ、ともて大きくなるはずである。先生が黒板の前に立って説明することなく、基本的にはこのような学習の個別化と集団化の原理で学校を作っているオルタナティブな学校もある。どうしても知っておいて欲しいことについては、先生が面白おかしく授業する時間もあるといい。